
白銀ノ騎士

ルエリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀ノ騎士

【Nコード】

N1878BA

【作者名】

ルエリ

【あらすじ】

。。。。
白銀の騎士を目指す人。 そのたびに待ち受ける恐怖とは。。。。

第1話 白銀の騎士の由来

「???」炎那えんなあ、ちよつと、早いじゃん、そんな急がなくなつていいだろ?」

炎那「横臥おつがおめえが遅いだけだよ!」

「???」ほんと、なさないわ!」

横臥「うるさいなあ!美貴みき」

俺たち、横臥 炎那 美貴 は旅をしている、もちろん、馬もいる3匹とも 旅をしている理由は、有名な 白銀の騎士になるためだ。 といつても、騎士だって、3人だけなんだ。 なんで、3人かというと。。。 話は長くなるけどね。

この白銀の騎士は、とある昔、横臥達の出身地、ティルコネイルにジンオウガ、という、世界で最強の敵が来るのだ。 こいつが来るのは、5年に1回、このときはまだ、ティルコネイルに、ジンオウガを倒せる奴はいなかった。 だが、唯一ジンオウガを追い出せるのは、生贄を出すことだった。 ジンオウガは酷いやつで、生きたままじゃないとダメらしい。 罰せられたヤツでも足りないから、村の結婚をしていない、老人、若者。。。 それでも足りないければ、親などをださなければならなかった。 親を失った子供はさぞ悲しかったことだろう。 横臥達もその中だった。 だがしかし、ある時、ティルコネイルで育ち、修行に出ている3人がいた。 その人達の名前は、カザール レムクレイス シルニア だ。

ティルコネイルの住民は、その3人を、勝手に希望の光だと思つて、その3人に、ジンオウガ討伐を依頼したのだ。 3人はその話を詳しく聞くと、心を痛ませた。 そして、毎日特訓をしていた。

そして、3人が帰ってきてから、1年たつと、ジンオウガがやって

くる日が来た。

3人は、住民を、森に避難させた。そして、ジンオウガがやってきた。

ジンオウガ「おい、生贄はどうした？」

カザール「いねえよ！、このクソ豚め！」

ジンオウガ「ほう、お前、俺様に挑発してるのか？、いつそのこと、お前を食ったほうがましか？」

レムクレイス「クソな野郎だぜ、シルニア、援護よろしく！」

シルニア「レムクレイスもがんばれよな！」

レムクレイスとカザールは、大剣を振り回した。

カザール「おらああああああああ！」

シルニアは、弓でジンオウガの目を狙い、打ったり、口を打ったりしていた。

カザール「いくぜ！シルニア、レムクレイス！デスクロニクルズ！」

シルニア、レムクレイス「おう！！！！！」

ドーーーーー！！！！！！！！

1瞬、目の前は、光で包まれていた。

森にいた住民たちにも、この音は響いた

住民「何だこの音？」

ドスン！

ジンオウガ「くそつ、こんなヤツにたおされるなんて、うっ」

シルニア「ざまみる！」

レムクレイス「食われたみんなの復習だ！」

カザール「へっ！」

そして、カザールたちは、森にいた住民を町につれてきた。このとき横臥たちは、10歳だった。

横臥「すごい！」

炎那「これさ、剥ぎ取れば、町の何かに使えるんじゃないか？」

美貴「そうだね！」

そして、住民たちは、ジンオウガの角などを取り、農場などに役立

てた。

そうして、カザール、レムクレイス、シルニアは、白銀の騎士と呼ばれるようになった。

え？なぜ白銀の騎士かって？、それは、この3人は、白銀一式の装備だったからさ。

とまあ、それからあれこれ、10年たって、まだ10歳だった横臥達は、白銀の騎士を、夢見ていた。

炎那「まあ、思い出してみると、すごいよな。白銀の騎士」

美貴「うん、最強といわれた、ジンオウガを倒したものね」

横臥「がんばろう！、白銀の騎士になるんだ！、俺たちは！」

炎那「おう！」

美貴「うん！」

続く

第2話 ダンバートンと言う都市 そして、1人の子供

炎那「横臥、美貴、あれ見ろよ」

美貴「町、かしら？」

横臥「結構にぎわってるな」

横臥たちが見たのは、露店やワゴンでにぎわっているとところだった。

美貴「あれ、兵士がいるわ」

横臥「本当だな」

兵士「お前達、どこから来たものだ？」

炎那「ティルコネイルです」

兵士「テイ、ティルコネイル！？、あの、白銀の騎士と言われる英雄がいるところか？」

美貴「そうですが、なぜそれを？」

兵士「白銀の騎士は、かつて、このダンバートンでも世話になった英雄だよ」

横臥「ダンバートンね、ほう、やっぱりすごいな、白銀の騎士は。」

兵士「通っていいぞ」

炎那「ありがとうございます」

横臥達は、門をくぐり抜けると、そこは、子供達が、わいわい遊び、大人達はお酒を飲みあっていた。

美貴「すごいねえ。」

横臥「お！、剣売ってる！、見に行こうぜ、炎那」

炎那「わかった。あ！、盾もあるじゃねえか」

ドスン！

美貴「いたっ」

子供「う、うわああああん」

美貴「ちよつと、大丈夫？」

ぶつかった子は、10歳くらいで、男の子だった。額には、少し傷がついていた。服は、茶色い古着で、ホームレスみだった。

子供「す、すみません……。」

美貴「傷があるから、手当てしようか。」

美貴は、救急箱から、応急処置セットを取り出し、子供の額の手当をした。

子供「あ、ありがとうございます。」

美貴「よかった、あ、君の名前は？」

子供「利樹きしとです。」

美貴「利樹君か。夢とかあるの？」

利樹「白銀の騎士になりたいです」

美貴「私達もそうよ。ティルコネイルの英雄だからね」

利樹「ティルコネイルから来た人なんだあ。旅してるの？」

美貴「うん。」

利樹「じゃあ、仲間に入れて？」

美貴「え？、でも、親は？」

利樹「いない。」

美貴「そう……。いいよ、私達は、ティルコネイルの白銀の騎士を目指してるから、利樹君は、ダンバートンの白銀の騎士ね。」

利樹「うん！。食料もってくる！」

美貴「うん。じゃあ、私のほかにも2人のお兄さんがいるから、話しておくわね。」

利樹「うん！」

そして、美貴は、横臥と炎那に、利樹の話をした。2人は、大賛成だった。

タッタッタツ

利樹「お姉ちゃん」

美貴「（そうだ、名前教えてなかったわ）こっちこっちい」

横臥「この子が、利樹君か。自己紹介するか。俺、横臥」

炎那「俺炎那」

美貴「私美貴」

利樹「よろしくお願いします！」

横臥、炎那「よろしくな」
美貴「よろしくね」

続く

第2話 ダンバートンと言う都市 そして、1人の子供（後書き）

感想いただけるとうれしいです

第3話 利樹の親

俺たち4人は、利樹を、横臥の馬に乗せて、旅をしていた。

横臥「なあ、利樹、なんで親いないんだ？」

利樹「僕のお母さんは、本当はティルコネイルで生まれていて、お父さんもそうだった」

美貴「そうなの。」

利樹「僕のお母さんとお父さんは、貧乏で、家もなかったんだ。そして、お金もないのに、お父さんとお母さんと、お兄ちゃんは旅していたんだ。僕以外全員。僕は、親戚の家に引き取られたんだ」

美貴「ひどいわ！」

炎那「お父さんの名前は？」

利樹「え、えと、カザーロ……。」

美貴、炎那、横臥「カ、カザーロ!？」

利樹「知ってるの？」

横臥「ティルコネイルの白銀の騎士よ！」

利樹「そうなんだ……。」

美貴「まだ、生きてるけど会いたい？」

利樹「あ、会いたいけど……。」

炎那「ちよつとまてよ、レムクレイスって女だったよな？」

利樹「おかあさんっ!？」

美貴「お母さんなの？」

横臥「だから、あんなイチャイチャしてたのか。」

美貴「(うわあ、シルニア仲間はずれジャン)」

炎那「じゃあ、お兄ちゃんの名前は？」

利樹「シルニア……。」

美貴「ティルコネイルの白銀の騎士全員、利樹の家族なの!」

炎那「それは驚き！」

横臥「何年間あつてないんだ？」

利樹「10年間」

美貴「利樹、何歳??」

利樹「15」

美貴「(背ちっちゃ)」

横臥「ストレスで、あまり背伸びなかったんだな。」

炎那「テイルコネイルに帰って、利樹の顔見せるか、白銀の騎士に」

利樹「いいの!？」

美貴「私たちも、久しぶりに故郷に帰るしね」

横臥、炎那「おう!」

続く

第4話 旅の途中

タツタツタ・・・。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオ!

利樹「な、何の声?」

美貴「敵のようだよ!」

横臥「利樹、その服じゃちょっと危ないし、武器もねえから、これ、着替えたりしてろ!」

横臥が利樹に渡したのは、少し大きい黒い鎧と兜と、輝く片手剣と銅の盾だった。

利樹「お、重いなあ」

炎那「あいつはなんだ?」

美貴「モンスター図鑑で見てるわ!」

パラパラパラパラ。。。。

美貴「わかったわ。ドスフロギィよ!、あいつ毒ふくのよ! 小さいのも毒ふくから!」

炎那「ちつ、小さいやつまで!」

横臥「ウォーミングアップだぜ!」

美貴「利樹君!」

利樹「な、なんででしょうか?」

美貴「調合できるかしら?」

利樹「ちよ、調合なら!」

美貴「ドスフロギィの毒にかかると、1分はうけていなきゃだめである程度の場合死んでしまうの。」

だから、解毒薬作ってほしいの!」

利樹「あの、解毒薬なら、何個があるので、今はコレ使ってください!」

美貴「ありがとう!」

利樹「がんばんなきゃ!」

炎那「うっ、つええな！」

横臥「あの毒食らったらやべえな！」

ドスフロギイ「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ」

炎那「美貴！、弓である、口の下あの袋、膨らんだときに弓を打つてくれ！、あれが毒袋らしい！」

美貴「分かったわ！」

利樹「美貴さん！、10個できました！」

美貴「ありがつ。。。。」

横臥「美貴危ない！」

利樹「（くそ！）おらあああああああ！」

利樹が投げたのは、横臥が貸した剣だった。

ドスフロギイ「ギャオツ」

見事に、剣は、ドスフロギイの足だった。

横臥「ナイスだ、利樹！」

利樹「う、うんっ」

炎那「横臥！美貴！やろう！まず毒袋を美貴やつてくれ！、横臥と俺は、胴体を切る！利樹！、手空いていたら、美貴の援護頼む！」

横臥「鎧のポケットに小型ナイフがあるから、それでやれ！、美貴を頼む！」

利樹「わ、わかりました！」

ドスフロギイは手も足も動かず、ただ、血が飛ぶだけだった。

横臥「最後だ！ おらあああああああああ！」

ドスフロギイ「グオツ」

利樹、横臥、炎那「よっしやあ！」

美貴「やった！」

炎那「日が暮れるまでにいこうか！」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1878ba/>

白銀ノ騎士

2012年1月6日16時46分発行